

破壊されたガザで、 子どもと家族を 支えます。



この夏のガザへのイスラエル軍の侵攻はこれまでになく激烈で、現地には多くの犠牲者と破壊が残されています。パレスチナ子どものキャンペーンでは、戦争中の7月末から地元のNGOと一緒に支援活動が続けてきましたが、10月になってようやくガザに日本人スタッフが入ることができました。戦争後の現地最新報告です。

360度の破壊

今回最も被害の大きかったガザ市東部のシジャイヤ地区。奥に入るにつれ破壊された建物がどんどん増え、見渡す限り破壊された家が続く場所がいくつもあります。近くで地上戦がありイスラエル兵士に犠牲が出たため、報復で近隣全体が破壊されたのです。住民の多くは地上戦が始まってすぐに家を捨てて避難をしていますが、突然のことだったため着の

み着のままだったばかりか、それが何月何日のことだったのかをはっきり覚えている人はほとんどいません。真っ暗な夜中にひたすら走ったと言う人もいました。

多くの人が日中は破壊された家の跡に戻ってきています。避難先は不自由で居場所もないうえに、再建のための足掛かりを得るために、できるだけ現場にいたいからです。不在の家には持ち主の名前と携帯番号が書かれた看板が掲げられています。

この辺りにはまだ不発弾が多く残されているかもしれないと言われながら、恐る恐る瓦礫を上りました。

あたりを見回すと高台にあった家、3階建など背の高い家ほど壊されているようです。2009年の戦争で破壊がひどかった地区を見た経験と比較しても、今回は破壊された範囲が非常に広いのが分かります。シジャイヤは密集した住宅地だからです。特に被害がひどいのは東側の国境に近い地域で、比較的新しく建てられた建物が多いところです。壊れた家の鉄筋に引っかかって宙ぶらりんになっている車椅子が見えました。高齢者が障がい者がいたのでしょうか。

50日間の集中的な攻撃

支援物資を受け取った家族をいくつか訪問しました。あるお宅は封鎖で職を失ったため、家で縫製の仕事を始めたばかりの夫婦と10代の2人の息子の家族でした。その家はイスラエル軍の基地に使用されたため、四方の壁にヘブライ語で方位とGPSの数字や歩哨の時間割が殴り書きされ、スナイパー用に壁に穴が開けられていました。壁が残ってい



る部屋も天井には穴が開きすべての家具がひっくり返され、電化製品はすべて破壊され、ガラスの破片や衣類や寝具が散乱して足の踏み場ありません。その中で下を向いたまま黙々と繕い物をしていたお母さんが印象的でした。

「高校を卒業した息子には大学への進学をあきらめさせた」と話すお父さんが、わざわざ息子に買いに行かせて私たちに冷たいコーラを出してくれました。こんな状況でも来客をもてなそうとするパレスチナ人の心意気に感無量です。この家では私たちの支援以外には何も支援を受けていないと聞きました。

別の家では家族10人が、家の中で唯一残った台所で寝起きしていました。ここでも瓦礫には全く手が付けられておらず、その中を家族が裸足で歩いています。インフラが全て破壊され電気も水もないのですが、他を借りるお金がないのでここにいるそうです。「17歳の娘が夜になると一人だけ瓦礫の中に座って眠らない」とお母さんは心配していました。「オレンジ一つ買わずにお金をためて建てた家が、まだ数年しかたって

いないのに壊されてしまった」とお父さん。慰める言葉がありません。

病院やインフラも

破壊されたワファ・リハビリ病院の跡を見ました。国境に近く、またハマス系ということで、寝たきりの障がい者のための病院が完全に破壊されています。幸いなことに入院していた人々は事前に避難して犠牲者は出ていないそうです。道路を隔てたところにジュース工場があります。2009年に訪問した時には、軍事侵攻によって巨大なステンレスの装置に開けられた無数の穴を一つ一つ溶接修理をして、ジュースやケチャップを作っていました。封鎖でガラスびんも入手できないため、エジプトから密輸されたプラスチックの管を膨らませて作ったペットボトルでした。その後もガザで唯一のジュース工場としてガザ産品の普及をめざし、ショールームも開設するなどガザ産業のシンボルの一つでした。しかし今回の侵攻で建物は焼け爛れ、装置はなぎ倒され、瓶が散乱し、すべてが破壊されていて、もはや再建は不可能だと感じました。

南部のハンユニス近郊のカララ地区。のどかな農村地帯にも戦車が入っていました。畑は戦車の轍でぐちゃぐちゃ、果樹や植物はすべてなぎ倒されています。地下トンネルを探して、ミサイルが集中的に投下されたクレーターが開いています。戦車の通り道にあった家は破壊されて跡形もなく、洋服や寝具の入っていたクローゼットが外にむき出しになっていました。ミサイルなどの破片もそこここに落ちています。この地域では、ほとんどの人が早めに避難したため、死者の数は少ないとのことでしたが、学校も部分的に壊され、どこを見ても一面破壊されています。

小高い丘の上の家は跡形もありませんでした。東はイスラエル国境の向こう側までが見え、反対側には地中海までが見えます。先祖代々ここに住んできたというおじいさんは、「家は壊されたが、家族は全員無事だった。それが何よりだ」と澄んだ目をして話していました。家族は破壊された家のそばにテントを立て、日中はそこで過ごしているそうです。

クザー地区は南部の住宅地で、イスラエル軍が救急車のアクセスを拒

ガザの被害状況



パレスチナ人の死者 **2,205人**
少なくとも70%が民間人、
521人が子ども、283人が女性

イスラエル側の死者 **71人**
うち66人が兵士



戦争中の避難民 **50万人**
人口の28%
現在も10万人以上が避難生活



家屋の崩壊 **18,000軒**
約11万人が家を失う



負傷者 **11,000人以上**
心理ケアの
必要な子ども **37万人**

32の病院のうち
6が活動停止、**17**が破損

人口の**7割**は
食糧支援が必要

4万人の農家に
影響が出た

否し負傷者が何日も放置されたため、多くの犠牲者が出ています。メインストリートにあるモスクの大きなドームが地面に落ち、巨大な給水塔も倒されていました。廃墟の中で暮らしている人たちの視線を痛いほど感じました。

国際社会は何をしているの？

当会が2006年に地元のNGOと一緒に開設したハンユニスのナワール児童館。心理サポートの専門家のサバハさんと子どもたちが「スケッチ」と呼ばれる短い演劇の稽古をしていました。「かくれんぼ」遊びがモチーフになっています。イスラエルの爆撃で子どもたちがたくさん倒れているなか、国際社会は何をしているんだ！と少女たちは叫んでいます。「バン・キムーン、バン・キムーン、どこにいる？」。そのうちにバン・キムーン（国連の潘基文事務総長）役の女の子が出てきて、「ガザだけでなく世界にはいろいろなことがあって、私は忙しいんだ！」と反論をするのです。「バン・キムーン、バン・キムーン」という叫びの中でお芝居は終わ

ります。ちょうどカイロでガザ復興の国際支援会議が開かれて各国が集まっている最中で、翌日には潘基文氏自身がガザ入りをしました。筋書きは少女たちが作ったようで、ガザに生きる10～12歳の子どもたちの理解力と敏感さには驚くほかありません。



秋はちょうどオリーブの収穫シーズン。児童館の庭で摘んだ緑色のオリーブの実をつぶしながら、子どもたちが収穫の絵を描いていました。皆とても集中しています。香りが広がっていてリラックス効果もありそうでした。別の部屋では低学年のグループが絵本を使った活動をしています。おばあさんとオリーブの木のお話。小さな女の子だったおばあさんが大きくなると一緒にオリーブが大きくなり、おばあさんの食べ物や

生活に必需のものとなります。指導員と一緒に低学年の子どもが、「オリーブオイル」と発音していました。オリーブ摘みのビデオを見たり、絵を描いたり、言葉、文字、文化、生活、理科などを総合的に学びます。翌週にはオリーブ畑に遠足に行く予定もあります。

笑うことのできる場所

2階ではお母さんたちが集まって、やはりオリーブ摘みの絵を描いています。その横でブロックで遊んでいる親子がいました。家を破壊された家族です。7歳の男の子と12歳の姉は7人いる子どもの中で特に戦争のトラウマがひどいそうで、お母さんと一緒にないところにも行けなくなりました。夫は無事でしたが、自分の兄弟を亡くしたというお母さん。「避難先は落ち着かず、児童館が唯一のよりどころなので、ここにきて他のお母さんたちと話をすることで気持ちが晴れる、そして子どもと一緒に遊ぶことで少し幸せな気持ちになります」ということでした。家をなくした別の



お母さんは、「子どもも私もここでは笑うことができます」と話してくれました。

ホールでは、100人近い母親たちが心理専門家の話を聞いていました。戦争による子どもへの影響についてたくさんの質疑が行われています。黒づくめで眼だけしか出ていないニカブとよばれる衣装を着た女性が多いのですが、皆積極的に質問しています。「パニックを起こした子どもに対してどう度対処するか？」大人が動揺したら子どもにそのまま反映するので、まずはあなた自身が落ち着いて、恐怖を克服して対応しましょう。子どもがひきつけを起こした時の応急処置には、こうやって足を高くしましょう。でも老人や乳児の時はすぐに病院へ、等々。

戦争中に「児童館が壊されて、大



好きな先生がいなくなった」夢を見た少年がいました。ナワール児童館にまた来られるようになって、もう怖い夢を見なくなったそうです。サバハさんに話を聞きました。「今回の戦争は、これまで以上に子どもたちに影響が出ています。みんなとても暴力的になっているし、反抗的だし、学校でも集中できない子どもばかりです。その傾向は特に小さい子ほど顕著です。大きな子どもたちは起きていることを理解しているし、何度も経験しているために、克服するやり方を自分なりに考えているようです」。心理の講師のアシュラフさんは、「80～90%の子どもたちは大丈夫です。復元力を持っています。でも10～20%の子どもたちは深刻な問題を抱えています」。

ハーシムさん一家の受難

聴覚障がいの人たちは、一般の人たち以上に怖い思いをしていました。日本にも来たことのある、アトファルナろう学校の技術指導員のハーシムさんが戦争中の状況について手話で話をしてくれました。

戦争が始まったあと、情報が少なくなって逃げるタイミングを逸したこと（ハーシムさんはシジャイヤに近いトゥファファに住んでいる）。死



ぬ時は一緒に死のうと家族で話したこと。それでもどんどん戦火が近づくので、逃げることにしたが、途中で逃げられなくなり、空き家に逃げ込んだこと。そこには食べ物も水もなくて、7日間ひもじい思いをしたこと。トイレのタンクの水を少しずつ分けたこと、などなど。手話通訳、英語の通訳、ビデオ撮影者、コーディネーター、みな涙を溜めて聞いています。自分たちの経験を思い出したに違いありません。

スクールカウンセラーのマリアムさんに話を聞きました。家を失った子どもたちは悪夢を見たり集中できなかったり、また長期にわたって戦



争の絵を描き続けるそうです。何人かの子どもの経験を聞きました。12歳のアヤは状況が分からないまま避難することになり、その後戻ってきたら家がなくなっているのを見て鬱状態になっていました。自分と同じ聴覚障がい弟の世話を任されて、責任感から怖い気持ちを抑えてしまったために心理的な負担を抱えてしまったルバ。家を失った上に不発弾が爆発して伯父といとこをなくし、本人も足にけがをしたワリード。食事中にガス爆弾を受け、のどにパンのかけらが引っかかって呼吸困難になり3週間こん睡状態だったマフムード、など。

死を賭しての脱出

今のガザの状況を短い言葉で説明するのは非常に難しいものがあります。2009年の侵攻後は、被害にあった人たちが怒りを込めてよくしゃべっていたように思います。しかし今回は人々の口がとても重かったです。種子島ほどの小さな場所が50日間ほぼ集中的に攻撃を受けたことで、人々の緊張度は半端でなかったのでしょう。疲労感が漂ってしまし

た。また破壊がひどすぎて手の付けようがない状態に見えます。2006年から数えると、ガザはこの8年間に4回の攻撃を受け、それがどんどんエスカレートしているのです。

それでも、7月中からナワールやアトファルナ、保健連合などの地元NGOは支援活動を開始していました。ガザの人口の4分の1が避難を余儀なくされるというこれまでにない危機的な状況で、多くの市民も避難した人たちを自分の家に泊めたり、食事を振る舞ったりしていました。ガザもかつてのレバノンのように、度重なる戦争状態を経験して、非常時の人々の対応能力が高くなってきているように見えます。しかしそれだけ多くの被害を体験したことを意味する悲しい経験値です。

ガザ復興の支援国会議が開催され支援額が発表されました。また国連の潘基文事務総長もガザを訪問したため、復興という言葉が盛んにメディアに踊っていましたが、誰も大した期待を持っているには見えません。54億ドルという一見大きく見える支援金額も、実際にガザで使われるのは半分の27億ドルだけです。

またこの金額は3年間の予算なので、1年では9億ドルに過ぎません。しかも支援の「お約束」に過ぎず、実際にカタルなど大口拠出を約束した国が払うのかどうかは不透明です。2009年の支援約束さえまだ全額は払われていないのですから。

非常に気になったのは、若い世代の人たちがガザから出ていきたいと強く考えていることでした。ガザの状況に絶望し、エジプト経由で地中海を密航船で渡ろうとする人たちが後を絶ちませんが、先月にはマルタ沖で船が沈没して一度に500人以上が行方不明になっています。地中海ではすでに何千人もが遭難しているようですが、その大半はガザのパレスチナ人とシリアからの難民です。

ガザの生活と支援は賽の河原の石積みのように、積んでは壊される、を繰り返しています。ガザの人たちのもとより、日本の支援者の皆さまにも、「またか」という疲労感があるかもしれません。みんなが希望を感じられるような支援を作り出したいと痛切に思いました。

当会の 支援活動概要



●食糧支援

7月末～10月中旬。アトファルナレストランでの炊き出し(障がい者330世帯に週1回ずつ3か月間)

●生活物資配布

7月末～継続中。ナワール児童館(ガザ南部)、保健連合(ガザ北部)、アトファルナろう学校(障がい者)を継続中(1000世帯以上)。

調理器具、プロパンガス、衛生用品、毛布など。

●通学リュックと学用品配布 継続中。南部の小学生(1000人)

●子どもたちの居場所、心理サポート、レクリエーション、軽食などの提供

9月～継続中 ナワール児童館(約400人)、保健連合(500人)、アトファルナろう学校(300人)他

●農家支援 苗の配布など:11月～継続中(100軒以上)

●国内での行動

キャンドルアクション(7月21日明治公園、左写真)、シューズアクション(8月23日芝増上寺)。写真展、映画上映会、報告会など。

